事業場点描 (1)

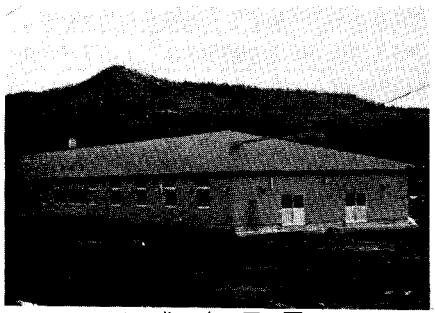
歌登事業場

天塩支場　末　武　敏　夫

昭和50年5月15日，宗谷支庁管内歌登町内，（北見）幌別川支流パンケナイ川の河畔の新設ふ化場で，新施設落成式に先立って，稚魚放流式が行なわれ，漁業者代表のN氏が稚魚壮行の辞を述べた。

しかし，このとき（落成式も含めて）この歌登事業場が，大正13年（1924）創設以来50年，昭和24年（1949）再開以来25年の輝しい歴史を経ていることを話題にした人達はほとんどいなかった。

古いさけ・ます人工ふ化場の創設にまつわる歴史的背景はそれぞれのふ化場の創設に意義があり，それ以来，事業が受けつがれ，または移転し，或いは休廃場の経路をたどっている。



ふ化室正面

この歌登事業場の創設も，こういう意味ではそれなりの創業の歴史と，社会的発展に左右され，盛衰の経過をたどっている。

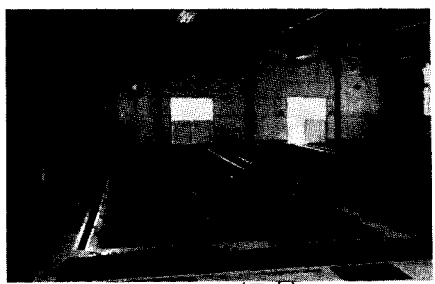
北海道水産試験場宗谷支場の初代支場長森房次郎の意見によって，大正元年（1912）頓別川にふ化場新設，大正8年（1919）天塩川にふ化場新設，大正10年（1921）徳志別川ふ化場新設，幌別川は当時北見国では遅い創設となっている。

歌登町は海岸がなく，内陸の町であり，沿岸の漁業者も自分達の町内（枝幸町）にないふ化場であるため，関心度が薄くなることは否定出来ない。

これは昭和6年（23年まで），昭和30年（32年まで）の再度の休場や移転などにも見られる。

昭和47年，適地調査の結果，現在地で揚水の見とおしを確認，昭和49年新施設（立体式ふ化器1千万粒）落成，オホーツク海区西部地域の主要ふ化場としての役割りは大きい。

枝幸沿岸漁業者のさけ・ます増殖意欲は，北見・網走地方と比較して，まだまだ高くはない。このふ化場が将来，資源増大の一端を受持って成長発展する見込みは，ただふ化場職員のみの努力だけでなく，漁業関係者等の協力の態度いかんによっても左右される課題と思う。



飼育池（屋内）

収容能力	立体式	900万粒
ふ化室兼飼育池上家	鉄骨造り長尺カラートタンぶき	500.0㎡
飼育池（屋内）	鉄骨コンクリート及びブロック造り	216.0㎡
集水井戸	コルゲート管φ4,000 深さ7.9m	2.0基